



V. ** / V. (1963) / 三宅
ス・ピンチョン (雄・伊藤卓基・中川ゆ
こ・広瀬英一・中村紘一
訳) / 国書刊行会 (2/2
3/20刊・¥3,200, 3,000)

この長編には、大きく分けて二つの流れがある。その一つ、プロフェインに関するものは、一九五六年のニューヨークを中心に、ダメ男である彼が、職業を下水道のワニ狩り、研究所の夜警等、転々と変えながら、ただ何とはなしに生きていく物語である。もう一つは、ステンシルの探索の物語である。ふとしたことから、父の日記に誌された「V.の女」を知った彼は、その謎を解こうと奔走する。V.とは、イギリスの女ヴィクトリア、義眼の女ヴェラ・メロビング、下水道の鼠ヴェロニカ、あるいは、それは謎の国ヴェイシュ、Vロケットの頭文字かもしれない。

V.とは、猥雑で混沌とした、二十世紀の一つの「陰」を示す言葉なのだろうか。

作者トマス・ピンチョンは、パーセルミやバースらと並ぶ、現代アメリカ文学の旗手の一人である。本編も、一人称、三人称が入れ替わったり、舞台(空間)や時間までもが複雑に入り組むという、現代文学特有の構造を持った作品である。その斬新な手法や、SF的ともいえるテーマは、SF界でも注目を集めており、近作『重力の虹』(七三年)が、ネビュラ賞候補に挙げられたこともある。(後)